

0, 1 歳児を担当する保育者が捉える 保育所に通う子どもの食をめぐる問題

—— インタビュー調査から考える今後の食支援の課題 ——

遠藤 純子・小野 友紀・岩崎 淳子

Problems of Eating Behavior in Nursery School Infants:
Analyses of Interviews with Nursery Teachers for 0 - 1-year-old Infants

Junko Endo, Yuki Ono and Junko Iwasaki

Abstract

The purpose of this study was to consider various issues concerning the eating behaviors of infants at nursery schools. Ten childcare workers responsible for infants aged 0 and 1 year olds were interviewed; their responses were recorded, transcribed and analyzed.

The results suggested the possibility that parents who are excessively busy have negative attitudes about childcare, and that these attitudes have a negative effect on their children's eating behaviors at home. A possible result of this may be children's weak chewing ability, fussiness about food, and unbalanced diets.

The authors conclude that because of this sort of situation in children's homes it is necessary to create support systems at nursery schools. In order to provide and cater for each infant's need, nursery school teachers and staff must strive to understand the parents' and infants' current situations. In order to move toward such a proactive family support system, it is necessary to review the current nursery school operations and the staff-to-staff relationships as well as relationships with parents. Future tasks for nursery schools include more elaborate observation which will aid in finding better ways to coordinate what happens at school with what is happening in children's homes.

Key words: 保育 (*early childhood care*), 食 (*eating behavior*), 保護者支援 (*parental support*)

1. 問題と目的

乳幼児期は食を営む力の基礎を培う重要な時期である(厚生労働省, 2012)。とくに離乳期である6か月頃から1歳半頃にかけては、母乳やミルクといった乳汁による栄養摂取から固形の食べ物による栄養摂取へと移行していく。その間に、咀嚼や嚥下といった口腔機能、手づかみ食べや食具を用いるための手の機能等、様々な側面における発達的变化を経験するが、同時に様々なつまづきを経験する場合も多い。池谷・柳沢(2013)の調査では、摂食機能の面では、0～2歳で45.7%, 3～5歳で33.3%の保育所で、噛まないで飲み込む子、口にためたままなかなか飲み込まない子、口の中でチュクチュク吸う子等の摂食に問題のある児がいるとしている。摂食に問題のある0～2歳児がいる保育所は半数近いという数字は決して看過できないものである。0～2歳は離乳期に重なる時期であり、保育者は一人ひとりの発達的变化を捉え、子どもの「今」の姿にふさわしい援助を考えていくことが必要である。しかしながら、こうした「子どもの咀嚼や飲み込み状態に合わせた個別対応をする」「子どもの一口の量を確認する」などの援助は保育士の勤務年数や子育て経験の有無が大きな影響を与えてい

るとの報告があり（森田・高木，2013），保育者が子どもの発達的变化を適切に捉え，一人ひとりの子どもの姿に応じてどのような援助を提供することが適切なのかを判断するためには，習熟度や専門性の向上が必要であると言えよう。

また，食事は生理的行為としての側面を伴うため，食事量や食事の速さ，アレルギーなど一人ひとりの子どもに応じた働きかけを行う必要があるが，保育施設での食事は家庭での食事と異なり，子どもが集団の中で食事を行うとの特徴を持つため，保育者には一人ひとりの子どもと集団の両方に配慮した働きかけが求められ（伊藤，2013），一人ひとりの育ちに加えて，相互作用の中での育ちへの視点も重要である。乳幼児期には栄養摂取の側面のみならず，食を通じた様々な経験を通して食べることへの意欲や楽しさ，喜びを経験し，食を営む力の基礎を培っていくことが重要であり（厚生労働省，2012），食支援を考える際には，食べる行為だけにとどまらず，食を通じて子どもが何を経験すべきかを忘れてはならないであろう。

保育所における食支援を考える際には，家庭への支援も重要である。とくに離乳期は保護者が授乳や食事について不安を感じやすい時期である。平成 17 年度乳幼児栄養調査結果報告（厚生労働省，2006）では，授乳や食事について不安な時期は出産直後をピークに減少するが，4～6 か月で再び増加し，1 歳前後で高くなり，それ以降また減少するという結果が報告されている。この保護者の不安が高くなる時期は離乳期に重なり，段階に応じた食事の準備の負担に加え，子どもの自我の育ちに伴う自己主張にどう対応したらよいのかについて迷いや不安が生じやすいと推察されるので，保育者は食事内容だけにとどまらず，保護者の不安を多角的に捉え，支援のあり方を考えることが必要であろう（大岡・石川ほか，2009）。

保育所に通う子どもは「家庭」と「保育所」の 2 つの場で生活をしており，それぞれの場で見せる姿や問題は共通していることと，異なることがある。「家庭」での子どもの育ちを支えることは保護者の役割であるが，それは「保育所」における育ちと決して切り離して考えることはできない。子どもの育ちを支えるためには，保護者を支えること，そして「家庭」における「子ども－保護者」の関係性をも支えることが不可欠であり，保育者は「子ども」「保護者」「保育の場」の 3 つの視点から状況を把握した上での支援を考えていく必要がある。

本研究では，離乳食とその前後の期間にあたる 0，1 歳児の担当保育者を対象にしたインタビュー調査を通して，保育所に通う子どもの食をめぐる問題を保育者はどのように捉えているか，「保護者の姿」「家庭における食をめぐる状況」「子どもの姿」の 3 つの側面から，具体的に検討することを目的とする。今後，保育の場で求められる食の支援のあり方を考える糸口としたい。

2. 方 法

（1）インタビュー協力者

東京都の X 区内の私立保育所 10 園に協力を依頼し，各園で 1 名ずつ 0 歳児クラスまたは 1 歳児クラスに勤務している保育者計 10 名（A～J）にインタビューを実施した。協力者は，勤務するクラスの中で最も経験年数の長い保育者であった。

（2）インタビューの時期および方法

保育所に通う子どもの食をめぐる問題を保育者がどのように捉えているのかを明らかにするために，半構造化法を用いたインタビュー調査を行った。インタビューの時期は 2015 年 12 月～2016 年 1 月

であり、協力者が勤務する各保育所において行った。いずれも所要時間は約 60 分であった。質問内容は、①10 年前と比較した子どもの変化、②食に関する問題をもつ子どもの具体的事例、③食事援助で大切にしていること、④子どものどのような姿をもって食欲の有無を判断するか、⑤「食べたくない」「もっと食べたい」「好き嫌い」への対応、⑥子どもの食べ具合・咀嚼の発達等に応じた形状や量の調整等についての調理員との連携、⑦子どもの食の状況について家庭と連携するために行っていること等であった。発話内容は、全て IC レコーダーで記録した。

（３）研究における倫理的配慮

インタビュー協力者に対しては、①研究目的、②研究への参加は自由意志で決定でき撤回もできること、③データは個人が特定されないよう匿名化され厳重に管理されることを説明し、了承を得た上でインタビューを実施した。

（４）分析の方法と手順

インタビュー協力者から得られたインタビューデータを逐語で文字に起こし、プロトコル化した。プロトコルは質的な意味をもとに一記録単位とし、個々の記録単位にラベルを付与した。付与したラベルをもとに、「保護者の姿」「家庭における食をめぐる状況」「子どもの姿」の 3 つの側面から内容の類似性に基づき分類し、分類したものにカテゴリー命名（サブカテゴリー生成）を行った。さらにサブカテゴリーの類似性に基づき、カテゴリー命名（カテゴリー生成）を行った。カテゴリー生成の後、カテゴリー間の関係を問題の生起因に着眼してカテゴリー関連図を作成した。

3. 結果と考察

インタビューデータは、「保育者の捉える保育所に通う子どもの食をめぐる問題」に焦点を当て、分析を行った。保育者の語りの中では、0, 1 歳児の現状にとどまらず、保育所に通う 0, 1 歳児以外の子どもの状況や、それまで出会った子どもの姿も含めて語られている部分もあったが、そうした部分にも重要な示唆が含まれていると考え、分析対象に含んだ。

（１）カテゴリー分類と各カテゴリーの内容

「保護者の姿」「家庭における食をめぐる状況」「子どもの姿」の 3 つの側面からカテゴリー生成を行った結果を表 1 に示す。それぞれ 2 つのカテゴリーが生成され、各カテゴリーには 2～3 のサブカテゴリーが生成された。

表 1 0, 1 歳児を担当する保育者の捉える食をめぐる問題のカテゴリー化

側面	カテゴリー	サブカテゴリー
保護者の姿	就労と家事・育児の両立	保護者の忙しさ
		食事準備
	育児における保護者の姿勢	子どもの食事に対する保護者の姿勢
		家庭でのしつけ
家庭における食をめぐる状況	食事の状況	子どもに目を向ける余裕
		家族で食事をする機会
	食事内容	朝食摂取の状況
		利便性の優先
		様々な食材に触れる機会
子どもの姿	食事場面でみられる課題	ベビーフードの使用
		咀嚼の弱さ
		食に向かう姿勢
	生活上の課題	偏食
		生活リズム
		体を動かす機会

1) 保護者の姿

「保護者の姿」では、〔就労と家事・育児の両立〕〔育児における保護者の姿勢〕の2つのカテゴリーが生成された。

①就労と家事・育児の両立

〔就労と家事・育児の両立〕では＜保護者の忙しさ＞＜食事準備＞の2つのサブカテゴリーが生成された。それぞれのカテゴリーの具体例を表2・表3に示す。

表2 保護者の忙しさ

A	フルでほとんど朝早くから夜遅くまで働いてなので、おうちのこともして、仕事もしてってなると、やっぱりどこで、手を抜けるかってなると、色んなお惣菜とかも売っているんで、そこもあるんですけどね。
C	忙しいんだと思います。今、朝も7時半から預けに来る方とかが多いので。0歳児で預けるお子さんは、早く来る方が多いんですよ。なので、調理している時間を、忙しいのとき短っていうことですかね。そういうのもあるんじゃないかなと思うんです。
H	全体的に、時間に追われている家庭が多いかなというのがすごく感じてるんです。朝も、お母さんも自分の身支度もあるし、子どもの身支度もあるし、起こす時間もあるし、夜帰ったら帰ったで遅くて、遊ぶ時間もないまま、ご飯を食べてお風呂に入って寝るだけ。そういった状況がどの家庭も多いのかなって。
I	やっぱり、親御さんの仕事の時間が、昔に比べると長くなっているんで、保育園自体も預かる時間も今延びてはいるので、そういうことで、どうしても夕飯が遅くなるとか。園から帰ってからの生活リズムは、昔に比べると、遅め遅めになっているのかなと。就寝時間が遅い。しかも、早く起きて、早く片付けなきゃいけないっていうような、子どものリズムが大人に近づいてるっていうか、大人の都合に合わせられてるっていうようなには思います。
J	やはり、保育園に入園できるお子さんっていうのは、正規で勤めているような職員で、お母さんもお父さんというようなことから、お子さんの保育時間がすごく長くなって、家庭での関わりも少しずつ減っているのかなっていうので、お子さんも状況も少しずつ変わっているのがあるのかなっていうのは感じています。

表2の＜保護者の忙しさ＞に関する具体例では、限られた家事・育児の中では食事準備に手をかけられない状況（A）（C）、時間に追われた生活で親と子の関わりをもつ間もない状況（H）（J）、帰宅時間の遅さゆえの夕食・就寝時間への影響や時間に追われた生活の状況（I）が述べられていた。

表3 食事準備

A	子ども同士がご飯を作っているおままごとをしてる会話が、「今日はおでんにする」って言ったんですよ。そしたら、「そうだね。じゃあセブンイレブンに買いに行こうか」って言ったんです。そして、お鍋を持って買いに行く様子なんですね。その子たちが。だから、あっおでんの材料買ってうちで煮るじゃなくて、おでんて言うとか、セブンイレブンで買ってみんなで食べよっていう会話が聞かれた時に、ああ、そうか。まあ、お忙しいからそうなのかなとも思ったんですけど、おままごとにもそういうものが出てくるんだなっていうのがちょっと思いましたね。
C	毎年、ちょっと悩みのネタになるのが、夕食の準備をしたりしていると、足元にまとわりついて来てとか、帰ると泣いちゃってご飯が作れないっていうのが、毎年1人2人はいるので、そういうのもあるんじゃないかなって思います。
F	お母さまたちがお迎えに来てから、この時間帯ですぐ食事ができるとなると、ちょっとレトルトとかで、してらっしゃるのかなっていう、私のちょっとした何となくって感じてるだけなので、何とも言えないんですけど。
G	極力みんな作ってくれますけどね。の方が多いです。

表3の〈食事準備〉に関する具体例では、ままごと遊びの様子からコンビニの惣菜を利用していると予想される家庭の例（A）、帰宅後は子どもの対応で食事準備が難しい例（C）、帰宅時間が遅い家庭はレトルトなどを利用しているのではとの推測（F）が述べられていた。一方で、「極力作ってくれている」（G）と述べているものあり、様々なケースがあることが予想される。

家庭によっては、帰宅時間の遅さと準備にかけられる時間の短さから、レトルトや惣菜を利用せざるをえない状況であることや、帰宅後に甘えたい子どもの気持ちを、家事をしながらも受け止めなければならぬ保護者の大変さに対する保育者の認識が読み取れる。また（A）は、生活状況が子どもの抱く「食事」のイメージに影響を及ぼしていることを示す事例でもあろう。

②育児における保護者の姿勢

〔育児における保護者の姿勢〕では〈子どもの食事に対する保護者の姿勢〉〈家庭でのしつけ〉〈子どもに目を向ける余裕〉の3つのサブカテゴリーが生成された。各々の具体例を表4～6に示す。

表4 子どもの食事に対する保護者の姿勢

C	今、でも家庭では食べさせちゃうので、最初、4月5月の当初っていうのは、食べさせてもらうのを待っている子が多いんです。置いても手を出さない、手を出せないっていうんですね。
G	家庭だとぐちゃぐちゃにしたいから、とか。 やっぱり手づかみは良くないって思っている親御さんも周りにいるんですよ。だから、手でつかむと怒ったりとかっていう。これも家庭によってだから、絶対そうして下さいとは私達の方から言えない
I	ので、手の神経もだんだん分化されるから、最初にこうやって、グーで握っちゃってから、指先とかでつまめるとかもうできるから、手づかみの時代には悪いことじゃないですよとは伝えてはいるんですけど。もう、汚れるのが嫌だから、おうちでは食べさせちゃってますっていう。

表4の〈子どもの食事に対する保護者の姿勢〉に関する具体例では、入所当初の子どもの姿から、それまでの家庭における保護者の食事介助の度合いが大きかったと予想される例（C）、手づかみで食べることで汚されたくないという保護者の思い（G）（I）、手づかみ食べはよくないと思っている保護者への働きかけ（I）が述べられていた。（I）からは、保護者の考えを尊重しつつ、子どもの発達の見通しを伝えながら保育者の思いを伝えている対応が読み取れる。

表5 家庭でのしつけ

D	そういう所が昔の方だったら多分、[子どもが食べ物を] 持って歩くっていうのが恥ずかしいからやめましょねって、子どもに多分、声掛けてらしたと思うんですけど、今の方あんまり気になさらないですよ。恥ずかしいとかそういうのが多分ないんだと思うんですけど。昔はそうでしたよね。恥ずかしいからやめなさいってね。とりあえず隠しとこみたいなね、のがないのかなってそれがちょっと不思議に思うところはあります。
G	家では座って食べませんって方も今までいますもんね。 昔、私が若い頃に勤めてた頃の食事の時の姿、それは食事だけではないんですが、ちゃんと、一応おうちの方でしつけをされてる子が多かったように思うんですよ。箸の持ち方だったり、箸は乳児は持たないですけど、それでも、スプーンだとかフォークだとかの持ち方だったり、食べ方にしても、どんな風に食べてるっていうのは、今現在もちろん、全てではないんですが、細かく言うようなおうちが減ってきたのかなっていうことが、給食の姿を見てわかるような感じが、私は感じるんですが。

表5の〈家庭でのしつけ〉に関する具体例では、子どもの姿が他者からどう思われるのかを保護者自身が気にかけていないことへの違和感（D）、座って食べることを子どもに教えていないと思われる事例（G）、細やかにしつけをする家庭が減ってきているとの保育者の実感（I）が述べられていた。

表6 子どもに目を向ける余裕

A	味付けとか固さとか大きさですね、そういうのを確認してもらって進めるようにしています。やっぱりこう、働いていて忙しいから、そこまでできないですっていう保護者の方も実際にはいるんですね。
G	子どものことを見てあげれてないなって方はいますよね。仕事がメインで。 今現在こういう風に食べてるので、こういう風に持って食べた方がいいんじゃないですかとか、食事風景とかを親御さんに伝えたりすると、あっそんな風に食べてるんだって言われる方もいらっしゃるくらい、あまり、自分の子どもさんはどんな風に食べてるとか、そういうのを気がつかないとか、あと、気にしないとか。
I	

表6の＜子どもに目を向ける余裕＞では、忙しさゆえに子どもの発達段階に応じた調理上の細かな配慮までは難しい保護者（A）、仕事優先で子どもに目を向けていないと感じられる保護者（G）、子どもの食事の様子を家庭では気にかけていないと思われる保護者（I）の事例が述べられていた。

2) 家庭における食をめぐる状況

「家庭における食をめぐる状況」では「食事の状況」「食事内容」の2つのカテゴリーが生成された。

①食事の状況

「食事の状況」では＜家族で食事をする機会＞＜朝食摂取の状況＞の2つのサブカテゴリーが生成された。各サブカテゴリーにおける具体例を表7・表8に示す。

表7 家族で食事をする機会

A	もう忙しいからご飯だけポンって置いて、食べときなさいって言って親が傍にいないから、やっぱりフラフラしたりとか、どんな格好してても、どんな持ち方してても、どんな食べ方してても、その場で教えてもらえないから、行儀が悪いっていう、まあその行儀っていう一言に片付けてしまいました。そういう姿勢が悪かったり、前かがみになって犬食っていうか、お皿が持てなかったり、そういう子が多いんですが。
C	真面目なお母さんが多いので、先ほどもお話ししたんですけど、子どもが先に食べてから、大人が別の物を食べてる、子ども用に作って、そういう面で大人の取り分けとか、昔は大人のも食べちゃいなよって家庭の方がどっちかというときが多いのかなと感じたんですけど、今年はしっかりしている方が多いですね。
D	お子さんは男の子3人で、年子なんです。1歳、2歳、3歳かな。やっぱり一緒に食べる余裕はないので、あと、お父さんと、お母さんは子どもが食べた後に、台所で立って食べてるって言うんですよ。わーと思って。それは大変だと思って。お母さんその時は見てると思うんですけど、ただ、食べてる余裕はとてじゃないけど、ないのかもしれないですね。介助したりとか、落っこしちゃうとか色々あるかもしれないから。だから、一緒に食べられる時が来ればいいなと思って。台所で、また、立ってっていうのがどうしてって、子どもが欲しがっちゃうんですって。だからそれで、何度も食べちゃうような状態になっちゃうので、それはよろしくないっていうことで、隠れて食べてるみたいな所がちょっと、あるみたいです。
E	孤食のお子さんが…話を聞いていても、子どもだけ一人で食べさせていますっていうのが、増えていくと思います。面談の時は、それではなくてっていうお話はするんですけど。親は後から夫婦そろって食べますとか。
H	もうほんとにみんなでお父さん、お母さん、子どもみんなで食べるっていう、そういうことはもうほんとに。逆にそういったことが稀なんだろうなって感じますね。

表7に示した＜家族で食事をする機会＞のサブカテゴリーでは、家族そろっての食事機会の少なさや孤食の増加が述べられていた。保護者と一緒に食べていないために食事のマナーについて学ぶ機会をもつことが難しい子どもの姿（A）、子ども用の食事を先に提供してから保護者は別に食べている事例（C）（D）（E）、家族そろって食べることは稀だろうとの予測（H）が述べられていた。（C）（D）

の事例は傍らで食事援助を行っていると考えられるため、孤食と状況は異なるが、保護者が「真面目な」「しっかりしている」ゆえに子どもと一緒に食べていない状況もあることが推察される。帰宅後に母親と乳児だけの環境であれば、母親は離乳食期の食事援助をしながら一緒に食べることは難しく、子どもが共に食べることの楽しさを経験したり、保護者の食べる姿から学ぶことは、自食が可能になる時期まで待たなければならない場合もあろう。

表 8 朝食摂取の状況

D	あまり、食べてきませんでしたっていうのは聞いたことないですね。今の所。そこはみなさんちゃんとしてらっしゃって、遅刻してでも一応食べさせるっていう。まっ自転車の上で食べてる子もいたりするんですけどね。おにぎり持ってね。あと、車の中で食べてたりもする子もいますけど、でもそれでも食べてるっていう感じですね。抜きではあまり聞いたことないですね。
E	食べてこれない状況だったり、面談の度に毎年必ずお母さん達からも朝ごはんが入らないっていう相談も受けるんですけど。食べてるってなると、登園中に食べながら来る。しまいには、保育室まで食べながら来てしまう子もいて、先に登園している子が欲しい欲しいということが、年々増えている。
F	おうちの家庭の環境で、食べてこないお子さんはいます。忙しいっていうのも、朝早いっていうのもありますし、寝坊してしまって、起きるのが遅くて、登園時間に間に合わないから食事をして来ないとかっていう姿はやはり。そうですね。全体で何人かはいますね。
H	起きてすぐに来るとか、起きたてで、牛乳一口飲んできましたとか、そういう方がありますね。

表 8 の＜朝食摂取の状況＞に関する具体例によると、朝食を食べてこない子どもは少数であることが (D) (F) のプロトコルからは窺われるが、食べながら登園する子 (D) (E)、朝食を食べてこない子 (F) や、牛乳一口だけの子 (H) の存在も述べられている。(F) (H) の背景には、余裕をもって起床し、ゆっくり食事をするのが難しい家庭環境が推察される。

②食事内容

〔食事内容〕では＜利便性の優先＞＜様々な食材に触れる機会＞＜ベビーフードの使用＞の 3 つのサブカテゴリーが生成された。それぞれの具体例を表 9～11 に示す。

表 9 利便性の優先

A	ただ、偏りがちな傾向はありますね。朝、例えば朝食はご飯だと汚してしまうから、パンだけにしますとか、片付けができないからパンだけ食べさせてきていますとか。そういう形ですかね。
D	ほんとバラバラなんですけど、まあ普通にご飯とお味噌汁って子もいれば、甘いパンを食べてる子もいれば、そうですね。でも簡単な物が多いですかね。子どもが食べてくれれば、甘いパンでも何でも、ドーナツでもなんでもいいわって多分なると思うんですけどね。みなさん苦労なさってるみたいですよ。食べさせるのが。
E	親は後から夫婦そろって食べますとか。あと、そういうお家は、子ども用に柔らかいものがどうしてもしやすいので、咀嚼とかの方で、保育園でお肉が噛めないとかっていうおうちを聞くと、そういう子が。
F	なんでしょう。野菜を取ってないかな、が多くて。レトルトがいけない訳じゃないんですけども、やっぱり簡単な食事っていう所で、親子丼とか、ハヤシライスなどの物が増えてきちゃってる所が見受けられるんですね。昔というか、前の方がまだみんなお野菜を取っていたような気がするんですけど、というのは少々感じている所ですかね。やっぱりお仕事する上で、簡単に食事が作れるっていうものが世の中に広がってきているので、その辺ですごく偏ってしまっているのかなって。
I	やっぱりどうしても、離乳食から完了食、ゼロの時期って食べやすいことを前提として、一口で食べられるものっていうものを多く食べさせてあげるご家庭多いんですよ。私の経験から言うと。

表9の＜利便性の優先＞に関する具体例では、片付けに手間のかからない食事（A）、簡単な食事（D）（F）、子ども用に柔らかいもの（E）、一口で食べやすいもの（I）などの食事内容が述べられていた。（F）では簡単に提供できるメニューによる野菜不足への懸念が述べられている。

（E）、（I）には「子ども用に柔らかいもの」「一口で食べやすいもの」という言葉がある。これが子どもが食べやすいように配慮したものなのか、利便さを求めたものなのか保護者の意図を判断することは難しいが、子どもの発達に合わない形状で提供されている状況があることは推察できる。

表 10 様々な食材に触れる機会

B	全員ではないんですけど、しっかり色んな食材の料理を食べさせてる家庭もありますけど。そういう「固いものより、柔らかいもののが多い」おうちもあるってことですね。
E	「固い物を食べる」経験が少ないのかなって思いますよね。
G	色んな食材に触れてはいないなっていうのは感じますよね。食べたことがない食材だったりとか、園で慣れていくっていう経験があるなっていうのは感じますね。
I	給食はあらゆるものが出るので、おうちではあんまり食べてないのかなっていうような、出されないようなものは割と、進みが遅いかなっていう感じです。

表10の＜様々な食材に触れる機会＞に関する具体例には、色々な食材の料理を提供している家庭もあるが（B）、固いものを食べる経験が少ないと感じることが述べられている（B）（E）。また、子どもの姿から様々な食材に触れていないと感じることや（G）（I）、園の食事を通して経験のない食材に慣れていくのを感じる（G）も述べられている。家庭で提供されている食事内容には差があることや、保育所での食事経験が食経験の少なさを補完する役割を担っていることが推察される。

表 11 ベビーフードの使用

A	全部ベビーフード使用の家庭も何件か。あとの方はベビーフードを使いながらも、ちゃんと他の食材も入れて、併用してる。
C	そんなに頻繁に使ってるって人もいないと思うんです。あとは、スティックになっていてお湯で溶かしてかけたりとかいう、ちょっとアレンジするためのものもあるので、一概には言えないんですけど、うちのクラスで4月生まれなんですけど、毎朝ベビーフードっていう子がいるので、やはり咀嚼が少ないんです。でも、あれって味見したことあるんですけど、柔らかいんですよ。食べやすくなっちゃってるんで。決して、忙しい時に利用する分には、悪いものじゃないと思うんですけど。咀嚼の面とか考えると、時々の方がいいのかなって。
G	中にはベビーフードの方もいましたけど、やっぱりベビーフードで進んできた子って、色々問題があったりとか。噛めない、飲み込めない。ベビーフードって柔らかいじゃないですか、全てにおいて。カミ「噛み」の時期であっても柔らかかったりするんで、この食事になって、噛めない、飲み込めないっていう子は何人かいましたね。あと、味が濃いので、園の薄味が食べれないとか。ベビーフードで育ててきた子たちは、色々そうだったのかなって、それが理由かね、なんて風にありましたね。毎回ベビーフードの方もいましたよね。極力みんな作ってくれてますけどね。稀ですかね。全てベビーフードっていうのは。

表11の＜ベビーフードの使用＞に関する具体例では、全てベビーフード使用の家庭・部分的に使用している家庭がある（A）、頻繁に使っている家庭は少ない（C）、全てベビーフードの家庭は稀（G）といった各々の状況や、咀嚼の弱さとの関係への懸念（C）（G）が述べられている。「ちゃんと他の食材も入れて」（A）、「作ってくれている」（G）などの下線部に、保育者の「保護者には手作りで様々な食材を入れて食事を作ってほしい」という思いが垣間見られる。

3) 子どもの姿

「子どもの姿」では、〔食事場面でみられる課題〕〔生活上の課題〕という2つのカテゴリーが生成された。

①食事場面でみられる課題

〔食事場面でみられる課題〕では＜咀嚼の弱さ＞＜食に向かう姿勢＞＜偏食＞の3つのサブカテゴリーが生成された。それぞれの具体例を表12～14に示す。

表12 咀嚼の弱さ

A	咀嚼力がすごく弱かったり、丸飲みっていうのがすごく多いですね。
B	固めのものも食べれないってことはないんですけど、あんまり咀嚼力がないですかね。柔らかいものと、麺類だったりすると、飲み込むように食べちゃったりとか。そういうお子さんも中にはいますね。
C	食に関してはですね。やはり、咀嚼の少ない子が増えてきている。噛む力が弱い子が多いかなと。
D	咀嚼がやっぱり苦手な子が結構いて。おうちで結局流動食じゃないですけどすごく、柔らかいものしか食べていないお子さんがいたりして。野菜が苦手なのは子ども全般なんですけど、ちょっと固めに煮た根野菜とかになると、途端に噛めなくなっちゃったりとか、りんごとか、そういう咀嚼が必要なものが飲み込めなかったりとかいう子は、いますね。
E	極端ですよ。噛める子は全然問題ないし、噛めない子は本当に噛めない。
F	やはり段階が上がってきて、ちょっと固形になってくると、噛まないで飲んじゃうっていう。
G	ベビーフードで育ってきた子たちは、噛めないんだよね。柔らかいもので来ちゃっているんで、咀嚼の癖がないというか。味だけ知っちゃって、口の機能がなかなか追いついてないというか。あとからのちのち出てきますよね。
I	昔から噛まない子は噛まない子としていましたが、噛まない子多くなってきたかなって思います。
J	丸飲みは多いです。

表12の＜咀嚼の弱さ＞については、インタビュー対象者10名中9名が述べており、咀嚼面で問題をもつ子どもが多く保育所でみられることが窺われる。咀嚼の弱さのほか、丸飲みの姿も挙げられている(A)(B)(F)(J)。咀嚼力の個人差(E)、離乳食が固形の段階になると噛めなくなる子の存在(D)(F)、ベビーフード使用との関連(G)が挙げられていた。また、以前より咀嚼の弱い子どもが増えていと述べている例もあった(C)(I)。

表13 食に向かう姿勢

F	精神的に食に、愛情不足が食に走ってしまうとかっていう、おうちでもしっかり食べているんですけど、園でもがっついて食べるっていうような、それは多分、精神的な甘えの方から来ているんだと思うんですけど。そちらの方からで。ちょっとむさぼるように食べるって姿は見られますね。毎年何名かはいますね。やはり子どもよりも、お仕事の方が大切だったりとか、自分の方に来てないなっていう、気持ち、親の気持ちが自分の方に来てないなって感じてるのかなっていう、心の中なのではっきは見えませんが。
G	お母さんが仕事の合間に来て、また違う所に預けて行ったりとか、ちょっと大きくなったんで、家に置いてビデオ見させて、お母さんは仕事行ったりとか。そういう家庭はありますか。その子は朝はゆっくりなんですけど、夜が甘えられてないっていうところからの崩れていうのはあったりしますけど。それも多分、夜が遅いので、多分ギリギリまで寝てるんですよ。食べてこないで、無気力で。っていう悪循環ですよ。そういう方はそうですね、いますね。朝はゆっくり寝てるので、お昼寝でまた寝つきが悪く、寝ると、お昼寝で起きる時に起きられず、そこからまたグズグズしてっていう悪循環です。全てが。夕飯も最近ようやく食べれるようになったんですけど、今までは、好きなものしか食べなかったりとか。それが気分的なあれなのか、ほんとに食べれないのかわからないんですけど。意欲もあんまりないんでしょうね。

H	<p>幼児さんで家庭環境で精神的に抱えてるお子さんで、今まで普通に食べていたうどんとかラーメンを嫌がるようになって、で、ほんとに泣いて登園するようになったんですね。なので、土曜日って結構うどんが出る回数が多くて、土曜日来ると「先生今日うどんだね。減らして」って言われる時があって、「あいいいよ」って、「食べられるだけ食べようね」って言うと、結構食べ始めるとばっと食べられちゃったりするんですね。おかわりもできちゃったりするんですけど、ほんとに気持ち的な部分が多くて、ちょっとご両親が例えば喧嘩したりとかすると、その日はちょっと落ち込んで、食事が出ないって時もあるし、家庭環境がこの子の場合は大きくて、食事になると泣いてしまったりとか、そういうことがあるので、食べることでなくてその子に関しては精神的な所で援助をしてあげて、安心した上で食事が行えるようにしてるんですけど。</p>
I	<p>何人かの兄弟で、すごく離れた時にボンってできちゃって、お母さんも忙しく働いてらっしゃって、お父さんも。子どもの面倒をどちらかと言えば、お兄ちゃんお姉ちゃんが見るような感じ。だから、お腹すいたらお菓子とか、そういうような感じで、ちゃんと三食、食事をしてないのかなっていうような。でもそれでも、お腹空いているだろう時間に食べないか、それは私はちょっといまだに疑問なんですけど。目の前にあっても、拒否する子がいたんですよね。口を閉ざすんです。泣くっていうか、もう口を開けないんですよ。こうやって口元までしても、って感じで。もう一口二口でも食べればもう、良しとするって。それをお母さんに伝えてあっても、いいです別に食べなくてもって感じの親御さんだったので。</p>

表 13<食に向かう姿勢>において、(F) はむさぼるように食べる子、(G) (H) (I) は、食に向かう姿勢に乏しい子の具体的事例を述べている。食に向かう姿勢について保育者は、仕事が大切で気持ち子が子どもに向いていない状況 (F)、母親の夜間就労による生活リズムの崩れとの関連 (G)、家庭環境による精神的な問題の存在 (H)、保護者の忙しさと子どもへの関心の薄さ (I) といった点を背景として捉えており、前述の<保護者の忙しさ><子どもに目を向ける余裕>との関連が推察される。

表 14 偏食

B	<p>何でもこの子食べるよねっていう子の方が少ないですよ。何かしら嫌いなものはどの子でもあります。特に野菜類が多いかな。特にでも最近では、甘いものが苦手っていうお子さんも、今年のクラスはいますね。2人ぐらいいるのかな。でも、やっぱりそれは最初の頃だけです。</p>
C	<p>やはり、味の濃いものを好む子が多いのと、好き嫌いは、野菜だったり、噛めないもの、噛みにくいもの、お肉のごろっとしたやつとか、れんこんとか、ベーコンも多いかな。</p>
E	<p>偏食が多いかなとは思いますが。</p>
I	<p>野菜系が苦手とする。うちのクラスはほんとによく食べるんであれですけど。野菜、生野菜、生も全部の生で出すことはあまりないんですけど、生野菜系はおうちでも食べないっていうお子さんが多いかな。野菜ですね。</p>

表 14 の<偏食>に関して、(B) (E) では、偏食のある子の多さが述べられている。野菜が苦手な子が多い (B) (I)、噛みにくいものが苦手 (C)、味の濃いものを好む (C)、入園時は甘いものが苦手 (B) といった子どもの具体例が挙げられていた。

②生活上の課題

〔生活上の課題〕では<生活リズム><体を動かす機会>の2つのサブカテゴリーが生成された。

<生活リズム>に関する具体例を表 15 に示す。登園時間の早い子どもや (B) 就寝時間の遅い子どもの存在 (C) (D) (H)、保育時間の長時間化による子どもへの負担 (D) が挙げられている。(C) では保育時間が長時間であっても早寝早起きという姿から、帰宅から就寝までの生活の慌ただしさや保護者の大変さを懸念している。帰宅から就寝までの限られた時間の中で食事・入浴をすませなければならぬ状況では、子どもの気持ちに細やかに応じる余裕をもつことは難しいと推察される。保育

時間の長時間化による子どもの生活リズムへの影響のみならず、親子で過ごす時間の長さ、そして過ごす時間の質にまでも影響を及ぼしていることが推察される。

表 15 生活リズム

B	今年の子に限っていうと、早いですね。もう 7 時半過ぎぐらいから登園し始めて、8 時半までには 7 人中 6 人は登園してます。
C	寝るのが遅いかなっていうお子さんがいますかね。ただ、それはいいんですけど、今のこの傾向として、早く寝て早く起きる…8 時半には寝て、6 時半とか早い子だと 5 時台に起きるっていう子が結構多いですかね。8 時半に寝るとすると、帰ってからすぐご飯でってなるのかなっていつも思うんですけど、お迎えが 6 時位の子でも、8 時半とか 9 時とかに寝ている子が多いですかね。…早く寝かせなくちゃって思う分、ご飯もせかしちゃうとか、そういうのが多いのかな。そういうのに、繋がってくるかなって。かえって、慌ただしんじゃないかなって。仕事していると、皆さんそうなんですけど。さらに、お母さんたち自分を苦しめているような感じがするんです。
D	だいたい 10 時超えて来ちゃう子が多くて、寝る時間も結構遅い子が多くて、声は掛けてるんですけど、やっぱりね、お母様の都合もありますからね。どうしてもそこまでは強要はできないんですけど。声は掛けてますけど。まあ本当に早めに寝てる方は 9 時ぐらいには寝てらっしゃるんですけど、平均的には。目立つ子はやっぱり 10 時、10 時半、11 時っていう場合があって。4、5 名はいると思います。
F	やっぱり保育時間が延びていますので、ぼんやりするとか、集中力がないとかっていうのはそうですね。
H	早寝早起きっていうのが当たり前のこととしてあったんですけど、それを教えていかなきゃいけないような状況になってきているので、10 時とか 11 時。乳児さんでも 11 時半まで起きている子は起きているんです。

表 16 体を動かす機会

D	車と自転車の移動が多いですよ。またここはとっても不便な場所なので、駅からもどこからも遠いんですし、どうしてもみんな自転車か、車かの移動になってしまうので、行き帰りも多分ね、余裕がないのもありますけども、歩くっていう時間はなかなか取れないかなと。やっぱりお仕事に余裕がない限りは歩く時間で取れないですよ。なかなかね。今の便利な時代にね。大人でもそうじゃないですか。歩くのちょっとめんどくさがっちゃうんで。お子さんと歩いて結構大変なんですね。
H	やっぱり歩くことが何より減っているんじゃないかなということがすごく感じますね。お散歩に出掛けても、ちょっとした距離で疲れてしまっている子が多いし、やっぱり歩くっていうことに乳児さん今見てて、やっぱり歩行が安定していない子だったり、もう、こうベビーカーや抱っこだったり、お母さんがこう抱えていて歩く経験が少ないって子が結構多くて、こちらで促してるっていう形もやっぱり多いですね。やっぱり登園とかも見てても、車だったり自転車の子が多いですから。休みの日に何したって聞くと幼児さんなんかは、ゲームして遊んだとか、お部屋の中に居たっていう子も多いですし、なかなか運動をおうちでするっていう経験が少ないかなって思いますね。

＜体を動かす機会＞に関する具体例を表 16 に示す。車や自転車を利用した登園、歩く経験の少なさを (D) (H) は挙げている。(D) では保護者の忙しさゆえに子どもと共に歩く余裕をもつことが難しいと述べられている。(H) では、休日に運動をする経験の少なさを子どもの話から推測して述べている。

(2) カテゴリーの関連

各カテゴリーの関連図を図 1 に示す。

〔就労と家事・育児の両立〕〔育児における保護者の姿勢〕を含む「保護者の姿」は、〔食事の状況〕や〔食事内容〕を含む「家庭における食をめぐる状況」に影響を及ぼす。さらに「家庭における食をめぐる状況」は〔食事場面でみられる課題〕〔生活上の問題〕といった形で「子どもの姿」に表れる。

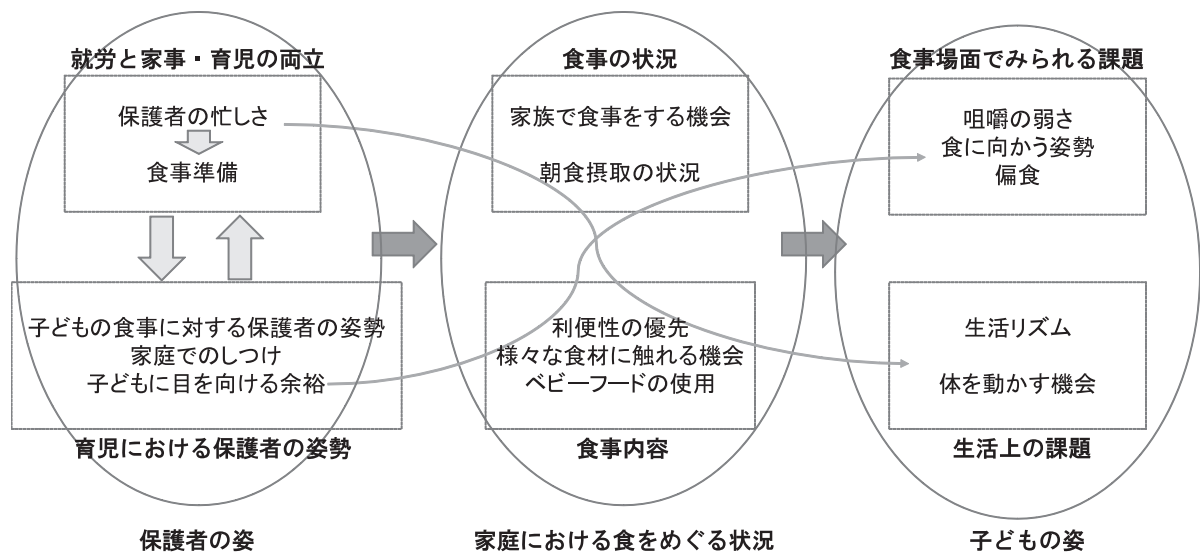


図1 カテゴリーの関連図

以下、それぞれの関係を考察する。

1) 「保護者の姿」と「家庭における食をめぐる状況」との関連

各サブカテゴリー内の具体例を概観すると、挙げられた問題点には＜保護者の忙しさ＞の影響を受けているものが多いことに気づく。「就労と家事・育児の両立」を目指す状況の中、保育時間の長時間化に表れているように、保護者は忙しさを抱えながら生活をしている。この＜保護者の忙しさ＞のために食事準備に手をかけられない状況、親子の関わりをもつ時間もない状況にある保護者の姿が述べられていた。保育所を長時間利用する子どもは増えており（全国保育協議会、2012; 中野、2013）、登園が早く降園が遅い家庭では、家庭で家事・育児にかかる時間が必然的に短くなり、手作りの食事を準備することは難しく、レトルトや惣菜を利用せざるをえない状況に繋がると考えられる。帰宅時間が遅いほど夕食の支度にかかる時間を30分以内ですませる割合が高いという調査結果もあり（小伊藤ら、2005）、＜保護者の忙しさ＞は＜食事準備＞に影響を与えていることが推察される。

また、＜保護者の忙しさ＞は食事準備といった物理的な状況だけでなく「育児における保護者の姿勢」といった心理的な面にも影響を与えていることが結果から読み取れる。＜子どもの食事に対する保護者の姿勢＞において「手づかみで食べることで汚されたくない」「保護者の食事介助の度合いが大きい」という姿勢は、汚れた物を片付ける時間的な余裕だけでなく、子どもの主体性を尊重できるだけの心の余裕のなさを反映しているとも言えるのではないだろうか。また、＜家庭でのしつけ＞において、「細やかにしつけをする家庭の減少」「座って食べることを教えていない」に表れる保護者の姿勢や、＜子どもに目を向ける余裕＞において「子どもの食事の様子や内容を気にかけていない」状況は、「そこまでできない」という言葉に象徴されるように、時間的にも心理的にも保護者の限界を超えていることが、その要因の一つとして推察される。支援を考えるにあたっては、そうした保護者の状況も捉えていく必要があるだろう。

上記のような「保護者の姿」は、「家庭における食をめぐる状況」に影響を及ぼすものと考えられる。子どもだけの食事となる状況は、食事時間に家族全員が帰宅することが困難であることや、空腹状態の子どものために帰宅してすぐ夕食を作って先に食べさせていることなどから生じており、それ

が＜家族で食事をする機会＞の有無に繋がっていると推測される。また、＜朝食摂取の状況＞で述べられた「食べながらの登園」や「牛乳一口だけ」といった姿も、起床から家を出るまでの時間の短さとの関連が推測される。

2) 「家庭における食をめぐる状況」が「子どもの姿」に及ぼす影響

「家庭における食をめぐる状況」では、〔食事の状況〕として＜家族で食事をする機会＞＜朝食摂取の状況＞が挙げられた。「保護者と一緒に食べないので食事マナーについて学べない」「食べながらの登園」などが述べられていたが、「一応は食べてきている」という保育者の言葉に象徴されるように、空腹を満たすだけの「食べる」行為でしかないならば、食の場を通じての経験、例えば食事マナーなどの食文化の習得や、家族とのコミュニケーションの中で育まれる関係性の構築の機会が喪失している可能性も考えなければならない。

また、〔食事内容〕として＜利便性の優先＞＜様々な食材に触れる機会＞＜ベビーフードの使用＞が挙げられていた。＜利便性の優先＞では、簡単に準備できる食事による野菜不足が懸念されていたほか、「子ども用に柔らかいものが出やすいのでお肉が噛めない」といった＜咀嚼の弱さ＞との関連を述べているものもあった。また、＜ベビーフードの使用＞と＜咀嚼の弱さ＞との関連を述べているものもあり、家庭での利便性を優先した食生活が咀嚼の弱さという形で子どもに表れている可能性も推察される。＜様々な食材に触れる機会＞では、固いものを食べる経験の少なさや、食べたことのないものは進みが遅いことが述べられており、＜偏食＞で挙げられている「噛みにくいものが苦手」「野菜嫌い」の子どもの姿との関連が考えられる。

3) ＜保護者の忙しさ＞が「子どもの姿」に及ぼす影響

「保護者の姿」と「家庭における食をめぐる状況」との関連、「家庭における食をめぐる状況」と「子どもの姿」との関連を前述したが、子どもの過度な食欲や、食べたがらないといった＜食に向かう姿勢＞の背景に＜保護者の忙しさ＞＜子どもに目を向ける余裕＞との関連が推測される事例が挙げられた。子どもが抱く不安定な精神状態が＜食に向かう姿勢＞として表出される場合もあると考えられ、こうしたサインを保育者は敏感に察知していく必要があるだろう。

また、＜保護者の忙しさ＞は、食事場面にとどまらず、子どもの生活面にも影響していることが推察される。サブカテゴリー＜生活リズム＞では、保育時間が長時間であっても早寝早起きの子どもの存在から、帰宅から就寝までの生活の慌ただしさや保護者の大変さを窺い知ることができた。また就寝時間の遅い子どもの存在のほか、保育場面で「ぼんやりする、集中力がない」子どもの姿も挙げられており、睡眠時間の短さが子どもの日中の活動に影響を及ぼしていることが分かる。＜体を動かす機会＞では、忙しさゆえに歩く経験が不足している状況が述べられていた。食支援を考えるにあたっては、こうした子どもの置かれている生活全般の現状を踏まえた上での配慮が求められよう。

4. 総合考察

(1) 忙しさの中での子育てを支える保育者の役割

カテゴリー間の関係でもみたように、保護者の忙しさが、育児における保護者の姿勢や、家庭における食をめぐる状況、そして子どもの姿に影響を及ぼしていることが推測される。小伊藤ら（2005）は、延長保育を実施する保育所が増加する中で、子どもの帰宅時間の遅延化が夕食時間、就寝時間などにも影響し、多くの保護者は時間に追われる生活に困難を感じながら毎日を過ごしており、そうし

た生活のあり方の子どもへの影響を指摘しているが、今回の調査では家庭生活への影響がさらに＜咀嚼の弱さ＞をはじめ、＜食に向かう姿勢＞＜偏食＞＜体を動かす機会＞といった子どもの姿に表れている可能性が示唆された。また、保護者の忙しさは＜子どもの食事に対する保護者の姿勢＞＜家庭でのしつけ＞＜子どもに目を向ける余裕＞といった育児における保護者の姿勢にも影響を与えるものと考えられる。特に、母親一人が帰宅後の家事・育児を一手に担うことで、時間的ゆとりのない生活になる傾向にある中（服部・足立，2007），時間のなさだけにとどまらず，子どもへ目を向ける余裕がなくなることや，子どもへの関心が薄くなること，子どもとの関わりの減少といった形で「育児における保護者の姿勢」に影響を及ぼすことは，子どもへ及ぼす影響を増幅させるものであろう。しかしながら，保護者の就労時間や保育時間の長時間化といった現状自体を変えることは困難である。ゆえに，家庭での限られた時間の中での子育てを支えていくことを保育者は考えていかなければならない。「子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査」（労働政策研究・研修機構，2012）では，仕事を持つふたり親世帯の母親の7.6%，母子世帯の16.8%，父子世帯の13.8%が，仕事と家庭生活のコンフリクトが起きる頻度を「ほぼ毎日」としており，ワークライフバランスが困難な場合に保護者は仕事を優先する傾向も窺え，多くの保護者は「仕事の時間が長すぎる」または「仕事で疲れ切ってしまった」ことが原因で家事と育児を十分に果たせなかったと回答している。このことから，就業時間の配慮等がなされなければ，保護者の努力だけでは子どもに関わる時間的・精神的余裕をもって家事育児を行うことは難しいと予想される。内閣府の「子ども・子育て支援新制度」に，「子ども・子育て支援とは，保護者が子育てについての第一義的責任を有することを前提としつつ，（略）環境の変化を踏まえ，地域や社会が保護者に寄り添い，子育てに対する負担や不安，孤立感を和らげることを通じて，保護者が自己肯定感を持ちながら子どもと向き合える環境を整え，親としての成長を支援し，子育てや子どもの成長に喜びや生きがいを感じることができるよう支援をしていくこと」とあるように，一義的責任は保護者にあることを前提としながらも，家庭での限られた時間の中での子育てという保護者の現状も考えなければならない。保育者が思い描く理想的な子育てや細やかな配慮を過度に求めることは，保護者に負担感やプレッシャーを背負わすことに繋がりがかねない。

ベネッセコーポレーションの実施した「第3回子育て基本調査」（ベネッセコーポレーション，2008）では，常勤の母親の「いい母親であろうとして，かなり無理をしている」傾向が強くなっていることが示されており，前述の，家事と育児を十分に果たせない現状の改善に加えて，保護者の負担感についても，支援をする上では考えなければならない。今回のインタビューの中にも，「真面目なお母さんが多いので，先ほどもお話ししたんですけど，子どもが先に食べてから，大人が別の物を食べてる，子ども用に作って」，「早く寝かせなくちゃって思う分，ご飯もせかしちゃうとか，そういうのが多いのかな。そういうのに，繋がってくるかなって。かえって，慌ただしいんじゃないかなって。仕事していると，皆さんそうなんですけど。さらに，お母さん達自分を苦しめているような感じがするんです。」とあるように，保護者の「真面目な」性格，「早く寝かさなきゃ」という思いが先立ち食事をせかしてしまう事例が挙げられている。しかし，双方のケース共に「～をしなければ」と必要な行動を達成することにばかり意識が向き，食卓や家庭の中で子どもと過ごすことの意味が見失われているようにも感じられる。「早く寝る」「バランスの取れた食事を取る」「発達に応じた食事を提供する」ことは無論大切であるが，保護者に助言をする際に行動レベルの達成事項だけを伝えたり，それが達成できているかで保護者を「あのお母さんはしっかりしている」と評価してしまうことは，保護者の負

担感を増大させたり、乳幼児期の親子の関わりの中で大切にされるべきことを見失わせる恐れがあると感じる。家庭でできることに限界があるのならば、それを補完していくことが保育所の役割であろう。保育所が支えるウェイトは大きすぎれば親子の関係が希薄になる可能性もあり、少なすぎれば子どもに「咀嚼の弱さ」「食事マナーが身についていない」など、様々な形で影響をもたらす可能性がある。どの部分をどのように支えていくかは各家庭の状況と子どもの姿、保護者の性格や能力によって異なるはずである。不公平感を恐れ、一律の対応しかしないのでは現状を打破することは難しい。より個別的に何をどのように支えていくべきかを捉え、保護者の状況に寄り添いながら支援をしていくことが求められよう。

（２）家庭における食卓での経験の補完を担う保育の場

食事内容の現状として＜利便性の優先＞＜様々な食材に触れる機会＞＜ベビーフードの使用＞が挙げられ、それらが＜咀嚼の弱さ＞と関連している可能性が示唆された。曾根（2001）は、離乳を進める中では、乳児の舌、歯ぐき、顎の動きを連携させて、咀嚼能力を次第に高めていくことが必要となるが、ベビーフードは、このような役割を果たすための段階的变化に乏しいため、咀嚼能力の発達において好ましいものではないと指摘している。しかしながら、利便性を優先せざるをえない事情があるのならば、そうした部分を補完すべく段階的变化を経験していける、より細やかな形状の調整などを保育所で行っていく必要があるだろう。こうした調整には、離乳食の作り手である調理員や栄養士が子どもの咀嚼の段階や食べ具合をチェックするなど保育者と連携をとることが必要であり、食事援助の際には、子どもの口の動きを待って援助できるだけの人的・物的環境も必要となる。児童福祉施設最低基準で示される保育士数は「乳児おおむね三人につき一人以上」であるが、家庭で親子が一对一で相互の動きを調整しながら（Toyama, 2014）、互いのタイミングを学んでいくのと同様な細やかさでの援助が求められるならば、保育者１人で３人の子どもの食事援助をする今の体制では援助の限界があると思われる。子どもが抱える様々な課題を乗り越えていくための保育者の援助や保育環境について、考えていくことも今後の課題であると考ええる。

食事の状況としては、家庭における食の場での経験、例えば食事マナーや家族とのコミュニケーションの中で育まれる関係性を構築する機会の喪失が懸念された。栄養摂取の側面にとどまらず、家庭における経験の補完を配慮した上で、食の場での経験の充実が求められるのではないだろうか。そのためには、保育者は子どもが家庭で食べているか、食べていないかといった結果だけを把握するのではなく、「誰と」「どのように」食べているかといった経過も捉えた上で、保育所でどのような経験をすべきか考えていく必要がある。「食べさせること」ばかりに傾注せず、食卓のもつ意味を保育の場で経験できるような環境を整えていくことが、より一層求められよう。

要約と今後の課題

本研究では、0, 1歳児を担当する保育者が保育所に通う子どもの食をめぐる問題をどのように捉えているのかを明らかにするためにインタビュー調査を行い、その諸相を分析した。その結果、保護者の忙しさが、育児における保護者の姿勢や、家庭における食をめぐる状況、そして子どもの姿に影響を与えており、＜咀嚼の弱さ＞や＜食に向かう姿勢＞、＜偏食＞などに表れ出ている可能性があることが示唆された。これが一般的傾向であるのかは量的な調査が必要であるが、家庭における子育ての状況を個別に把握し、そのニーズに応じた援助を保育の中で展開する必要があることに異論はない

だろう。一人ひとりのニーズに応じた援助を可能にするための保育体制，職員間の連携，保護者との連携が現在どのように展開されているかといった現状を明らかにし，家庭と保育の場を繋ぎながら子どもの育ちを支えるための支援を模索していくことが今後の課題である。

引用文献

- 服部伸一・足立正（2006）幼児の就寝時刻と両親の帰宅時刻並びに降園後のテレビ・ビデオ視聴時間との関連性。小児保健研究. 65, 507-512.
- 池谷真梨子・柳沢幸江（2013）全国保育所における園児の摂食に関する実態調査。栄養学雑誌. 71, 155-162.
- 伊藤優（2013）幼児の集団食事場面に関する研究の動向。広島大学大学院教育学研究科紀要. 62, 143-150.
- 小伊藤亜希子・岩崎くみ子・塚田由佳里（2005）帰宅時間の遅延化が子どもの家庭生活に及ぼす影響—延長保育実施園に通う子どもの調査より—。日本家政学会誌. 56, 783-790.
- 森田悠子・高木道代（2013）保育士による離乳の援助の現状。佐野短期大学研究紀要. 24, 59-68.
- 中野佐知子（2013）幼児のテレビ視聴時間の減少とその背景～幼児生活時間調査・2013の結果から～。放送研究と調査. 11, 48-63.
- 大岡貴史・石川健太郎・村田尚道・内海明美・弘中祥司・久保田悠・拝野俊之・山中麻美・横山重幸・小倉草・星野美恵子・野本富枝・向井美恵（2009）離乳期の食事についての保護者の疑問や不安に関する実態調査。口腔衛生学会雑誌. 59, 7-15.
- 曾根眞理枝（2001）ベビーフードの現状について。横浜女子短期大学紀要. 16, 47-55.
- Toyama, N. (2014) The development of Japanese mother-infant feeding interactions during the weaning period. *Infant Behavior & development*. 37(2), 203-215.
- 脇田満里子・野村幸子（2011）離乳食場面における母と子の相互交渉の経時的変化。奈良県立医科大学医学部看護学科紀要. 7, 16-23.
- ベネッセコーポレーション（2008）第3回子育て生活基本調査（幼児版）第2部テーマ別調査結果の分析 第1章働く母親の子育ての特徴。
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/kosodate/2008_youji/hon/pdf/data_07.pdf 2016年3月23日最終アクセス
- 厚生労働省（2006）平成17年度乳幼児栄養調査 <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2006/06/dl/h0629-1b.pdf> 2016年3月22日最終アクセス
- 厚生労働省（2012）保育所における食事の提供ガイドライン
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/pdf/shokujiguide.pdf> 2016年3月22日最終アクセス
- 全国保育協議会（2012）全国の保育所実態調査報告書2011
<http://www.zenhokyo.gr.jp/cyousa/201209.pdf> 2016年3月23日最終アクセス
- 労働政策研究・研修機構（2012）子どものいる世帯の生活状況および保護者の就業に関する調査
<http://www.jil.go.jp/institute/research/2012/documents/095.pdf> 2016年3月23日最終アクセス

謝辞

本論文の執筆にあたり，多大なご協力をいただきました保育所の先生方に心から感謝申し上げます。

（えんどう じゅんこ 初等教育学科）
（おの ゆき 聖徳大学短期大学部保育科）
（いわさき じゅんこ 聖徳大学短期大学部保育科）